

# 製本のススメ

Vol. 102

つい先日まで猛暑だと言っていたのに、気が付けばすっかり秋になっています。セミはいつから居なくなってスズムシが鳴いているのでしょうか？風流を感じる暇もない生活は、少々見直す必要がありそうですね。

今回は「型」の話し

抜き型ではありません、いわゆる加工スタイルのお話です。製本はあくまでも注文制作ですから、お客様の意向に沿うのが基本ですが、上製本やフランス装・和綴じ本等は、制作スタイルが有り ある程度はその型にのっとって進まなくてはなりません。

一番の基本は『縦組みと横組み』です。縦書きは右から左へ 横書きは左から右へ文字が書かれます。当然 縦書きは右開きとなり、横書きは左開きです。この形を崩すことはあまり無いと思いますが、タイトルも同じように区別するのが好ましいでしょう。左開きなのに縦書きの表題は違和感がありますね。これは一般の冊子も同様です。

上製本では、表紙の大きさが本文より少し大きめです。これは表紙で大切な本文を保護するのが目的で、本の厚みや大きさが3ミリ～6ミリ程度の中で、製本会社が決定しますので、発注の際には本文の仕上りサイズで打ち合わせを進めて下さい。

表紙を加工する点では、和綴じ本やフランス装丁本があります。フランス装では上製本同様に表紙が若干大きめで、目的は同じですが表紙は上製本よりも薄い為、1ミリ～3ミリ程度が基本です。これも製本会社で決定しますが、印刷トンボがある場合には、その指示に沿って進む事が多いため、加工会社と事前の打ち合わせが不可欠です。また見返しは小口に糊を入れません。これは、壊しやすく装丁し直して、自分用の蔵書本へ進むための名残です。

和綴じ本では、本文の大きさと同じに表紙を付けます。表紙用紙の厚み分だけ微妙に大きく感じる場合がありますので、表紙が大きいと勘違いされることもあります。また多くの場合表題は『題箋』と呼ばれる紙を貼ります。貼り位置は小口側ですので表紙に直接印刷する場合にも、小口側が好ましいと言えます。

冒頭に書いた通り、製本はあくまでも注文制作ですので、お客様の意に添うように作るのですが【型】にはそれなりの理由があり、見栄えや堅牢さ、使い勝手の良さであり、加工の容易さです。昔から培われてきた経験によってできていますので、ぜひとも知識の一つに加えて下さい。特にデザイナーの方々には知って頂きたいものです。



Teabreak

『型』を知ってこそ形破りな物が生まれます。どうにもならない事を「形無し」と言います。昔の人たちは うまいことを言いますね。

by (株) 井関製本